

英語授業における支持的風土の重要性 －研究授業から見た課題と今後の取り組み－

井 上 浩 巳*

The Significance of Positive Classroom Environments －Problems and Future Aspects through an Open Research Class－

Hiromi Inoue

要約

EFL (English as a Foreign Language) として英語教育を行う日本において、学習成果を大きく左右する教室環境がいかに受容的かつ支持的であるかが学習の成功の鍵を握る。また、コミュニケーション能力の習得を重視する現代においては、コミュニケーション活動を阻害する心理的要因を排除し、自由に安心して発言できる雰囲気を作り出すことも教師には求められている。

したがって本研究では、英語授業における受容的環境である支持的風土について、2015年度高松短期大学秘書科で行われた研究授業を通して、その重要性を再確認するとともに、教室環境を理想的なものにするための取り組みについて提案する。

キーワード：支持的風土、協同学習、実用英語技能検定

(Abstract)

English education in Japan has typically been conducted in a situation that is not classified as ESL, rather EFL. Therefore, positive classroom climates hold the keys to both learning performances and results. Teachers are required to exclude mental factors which impede communicative activities, and also come up with ideal educational settings where learners can speak freely with a sense of relief.

The purpose of this paper is to reconfirm how positive classroom environments are important in English classes and to find ways to make classroom atmosphere ideal, as demonstrated through an open research class conducted by the Department of Secretarial Studies at Takamatsu Junior College in 2015.

* 提出年月日 2015年11月30日 高松短期大学秘書科講師

Key words : positive classroom environment, cooperative learning, EIKEN Test

1. はじめに

英語学習者が抱く不安、ためらい、自信、自意識などの情意的要因が学習の成功に関与していることは多くの教師が経験するところであり、情意フィルターを低く保ち、インプットを受け入れやすいような学習環境を作ることが教師の役割の一つである¹。また、学習者が自由に発言しにくい教室の雰囲気や気恥ずかしさ、間違いをして笑いものになりはしないかという不安や脅威といった心理的要因を取り除くことも教師には求められる。「支持的風土」は、そういった心理的不安が排除され、失敗や間違いが受け入れられ、学習者にとって居心地のよい環境、互いに学び合い、教え合い、励まし合える環境、つまり学習における環境が受容的かつ支持的であることを指す。

日本において英語は、教科の一つ、入試科目の一つとして一般的に認識され、英語が広く使用されている環境における第二言語としての英語ESL (English as a Second Language) ではなく、英語を母国語としない国において英語を学校における一教科として教えるEFL (English as a Foreign Language) として教育がなされている。したがって、学習が行われる教室環境が学習成果を左右する大きな要因の一つとなる。また、長年行われてきた文法や訳読偏重の英語教育への批判から、「オーラルメソッド」や「オーラルアプローチ」など様々な方法を経て、現在のコミュニケーションを中心に据えた教育へと変化した。1972年施行の『中学校学習指導要領・外国語』において、従来の「学習活動」に代わり「言語活動」が新しい柱として導入され、文部省は「聞くこと、話すこと、読むことおよび書くことにおいて、それぞれ言語活動を行なわせる」と定義し、「言語活動」を言語の実際の使用につながる総合的な活動と考えた²。現行の『中学校学習指導要領・外国語』においては、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」、『高等学校学習指導要領・外国語』では、「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの基礎的な能力を養う」と目標が定められている。コミュニケーション力が注視されるようになった結果、授業におけるコミュニケーション活動が盛んになる一方で、上記に述べたような心理的要因がコミュニケーション活動を阻害する場面が多く見受けられる。

以上のことを踏まえ、本研究では、英語授業における支持的風土の重要性を再考するとともに、研究授業を通してそれらの環境を作り出す具体的方策を述べていく。

2. 支持的風土と協同学習

片岡（1986）において、支持的風土づくりの手掛かりを次のように示している³。

- ①相手の発言や行いについて、相手の立場に立って相手の考えをくみ取る。
- ②どんな考えもばかにしたり、笑ったりしない。「はみ出し」を大切にする。
- ③相手の発言や行いに対し、良いところを探し見つける。
- ④相手に注文するときは、相手を責めるのではなくて率直に自分の考えを示す。

また大塚（1977）においても、支持的風土とは、①相手の発言の良いところを探す、②何を言っても笑われない、③相手の身になって考える、④相手と競争するのではなく協同する、と定義している⁴。このような考えに基づいた教師やクラスの仲間の援助と励ましこそが、互いを認め合い、間違いや失敗を大切にし、その中から正しい考え方や生き方を学ぶ態度を習得していくことにつながっていくと推察される。支持的風土に相反する言葉として防衛的風土がある。これは、①相手の発言の誤りや弱点を探す、②相手の発言を攻撃する、③攻撃されたら言い立てて自分を防衛する、④相手と協同するよりも競争する、といった攻撃的、対立的な集団関係を指す⁵。

当然支持的風土は、ペアもしくはグループで取り組む協同学習においても必要不可欠であると考えられる。協同学習とは、スモール・グループを活用した教育方法であり、仲間と協力しあうことによって自分の学習と互いの学習を最大に高めようとするものである⁶。英語授業においては、アウトプット仮説で主張されているように、学習者が目標言語をアウトプットすることは第2言語習得において不可欠であり、学習者同士の意見交換などでアウトプットする機会の増す協同学習は広く活用されている（磯田 2012、今井 2011、盛岡 2014）。また、グループワークが効果的に行われることで学習者の練習量、特にコミュニケーション練習の量を増やすことができる、グループ内で助け合いなどの相互作用が活発になる、教師への依存心が弱まり、積極的な学習態度になる、実際のコミュニケーションにより近い状況で練習することができる、などが利点として挙げられる。

3. 研究授業について

本学における研究授業は、教員の指導力ならびに授業方法の改善、学生の実態把握等を

目的に、2003年度より各学部・学科単位で学期に一度の割合で実施されている。以下において、2015年度に高松短期大学秘書科で筆者が行った「英語Ⅰ（ベーシッククラス）」の研究授業について、授業の概要ならびに研究授業後の検討会で得られた他の教員からの意見について紹介する。

〈研究授業〉

日 時：2015年6月15日（月）4校時（14：40－16：10）

場 所：本学1号館 1302講義室

科 目：英語Ⅰ（ベーシッククラス）

受 講 生：本学秘書科1年生34名

参 観 者：本学秘書科教員5名、本学発達科学部教員1名

〈授業検討会〉

日 時：2015年6月15日（月）5校時（16：30－17：30）

場 所：本学1号館1階 会議室

参 加 者：本学秘書科教員6名（研究授業担当教員を含む）

4. 本講義の授業内容および授業形態

本講義は全学共通科目の1つであるが、秘書科では後期開講の「英語Ⅱ」とともに必修科目として1年次の学生全員が履修する。国際化社会・情報化社会に対応できる能力を身に付けることを目標に、英語の他に「情報機器演習Ⅰ・Ⅱ」も必修となっている。

英語は中学・高校と6年間学んできた背景があるため、学生個々の入学時の学力の幅を考慮し、2010年度より入学前に英語の試験（プレイスメントテスト）を実施し、その結果によって2つのクラス（アドバンスとベーシック）に分け、習熟度別に授業を行っている。学生数によっては3クラス編成になる年度もある。また、前期末試験の結果を元に、アドバンスクラスとベーシッククラスで学生の入替えができるよう配慮している。本年度の「英語Ⅰ」の学生数は、アドバンスクラス32名、ベーシッククラスが34名であった。

アドバンスクラス、ベーシッククラスともに文法基礎の定着ならびにリスニング力と語彙力の強化を図り、実用英語技能検定（以下、「英検」と記載）の合格を目指している。

ベーシッククラスが3級、アドバンストクラスが2級、準2級の合格を目標に、クラスごとにテキストを選定し授業を展開している。本講義を受講している2015年度の入学生は、入学時に英検3級を取得している学生が8名、準2級が4名であった。

前期「英語Ⅰ」では、徹底して文法の基礎力を養い、これまでの英語学習の復習を行うことで、後期「英語Ⅱ」の応用につなげていけるよう授業内容を構成している。その他に、語彙力を高めるための例文を用いた新出語彙・熟語の学習、リスニング力アップに向けたディクテーション活動を行い、毎時間小テストを実施することでその効果を測定している。

後期の「英語Ⅱ」では、実際の過去問題にできるだけ多く取り組み、問題の形式や頻出熟語・表現・パターンに慣れ、全員の検定合格を目指している。「英語Ⅰ・Ⅱ」とともにコミュニケーション力の向上も重要視しており、既習の文法内容を用いた協同学習によるコミュニケーション活動を取り入れている。

2015度前期の講義内容は、次の通りである（シラバスに一部変更有り）。

第1回	オリエンテーション	第9回	進行形
第2回	be動詞・現在	第10回	多様な疑問文
第3回	be動詞・過去	第11回	助動詞
第4回	一般動詞・現在	第12回	英文の型
第5回	一般動詞・過去	第13回	受動態
第6回	特殊な文	第14回	比較
第7回	未来形	第15回	前期総括と目標到達度診断
第8回	前半期の復習と質疑応答		

次に、本講義の到達目標は下記の4点である。

- ・ 英語を用いて、読む・聞く・書く・話すという基本的なコミュニケーションを行うことができる。
- ・ 英文法の基礎を理解することができる。
- ・ 英文を聞き、正確にリピートし、その内容を理解することができる。
- ・ 英語Ⅰ・Ⅱを通して、実用英語技能検定3級～2級に合格することができる。

英検3級合格＝中学校卒業程度のレベルであるため、文法的には比較的容易な内容であるが、中学校の段階で躓いている学生も多く、一からスモールステップで段階的に学ぶ“学び直し”をキーワードに授業を行っている。そのため、高校時の「分からないから丸暗記」から、「一つひとつ正確に分かる」という経験を多く積むことで、途中で投げ出す学生もほとんど見られない。授業やコミュニケーション活動にも積極的に参加し、課題に対しても丁寧に取り組む学生が多いのがこのクラスの特徴であり、アドバンストクラスとの大きな違いでもある。この授業への参加意欲の高さや支持的風土は、研究授業後の検討会においても高く評価されている。

5. 研究授業の概要

4月の開講から第10回目の授業となる本研究授業では、題材を「多様な疑問文」とした。様々な疑問詞を使った疑問文の構造理解を初めに行い、その後それらを使ったコミュニケーション活動へと発展させていき定着を図った。学習指導案で示す【学習内容3. 会話練習を行う】【学習内容5. (5) コミュニケーション活動】においては、学生一人ひとりの活動量を増やし、アウトプットの機会を確保すること、実際のコミュニケーションにより近い状況で練習できるようペアワークと協同学習を取り入れた。

学習目標は、(1) 疑問詞で始まる疑問文の語順等の文法構造を理解することができる、(2) 疑問詞／Yes-No疑問文を使って、身近なものや人物について尋ねたり、答えたりすることができるという2点を設定した。

学習内容や指導・支援活動は次に示すとおりである。それぞれの学習において配慮する点や目的、評価についても記載している。

【本時の学習指導案】

学習内容・活動	指導・支援活動	評価
1. 出席確認を行う。 2. 小テスト、次週の範囲の発音確認を行う。	[英検1次対策] ・語彙力を高めるため、毎時間、英検類出語彙の小テストを行う。 ・語彙やフレーズを目にする機会が増えるよう、正答を自分で探させる。 ・少しでも多くの英語を発する機会を設けるため、点数を英語で発表させる。 ・パターンプラクティスを行うことで思考を促し、単調にならないよう留意する。	「意欲」 授業時間外学習に熱心に取り組んでいるか。 大きな声で発音練習ができたか。
3. 会話練習を行う。 (1) What did you eat for lunch? (2) Which season do you like the best?	[英検2次（面接）対策] ・英語を話すことへの苦手意識を低くしたり、身の回りの物の英語表現を覚えたりできるよう、話しやすいトピックを選ぶ。	「意欲」 積極的に会話しようとしていたか。
4. 前時Unit 5の復習（宿題の確認）を行う。	・全ての設問において主語と動詞を確認することで、文法基礎の徹底を図る。 ・授業への積極的な取り組みをねらい、挙手制にする。	「理解」 間違えた箇所の確認・復習ができたか。
5. 本時の学習Unit 3をする。 (1) 疑問詞の確認 (2) 疑問詞の意味、使い方、答え方の確認 (3) 疑問詞を使った疑問文の作成 (4) 文法説明	・気づきと定着を促すため、文法（疑問文の作り方）を段階的かつ帰納的に提示する。 ・同じ表現を何度も繰り返し用いることで、文法構造を理解しやすいようにする。 ・学習した内容を使ってコミュニケーション活動を行うことで、知識・理解を実践へと発展させる。	「意欲」 分からない語句や表現等について辞書で調べたり、教員に質問したりできていたか。
(5) コミュニケーション活動	・意欲喚起とバリエーションをつけるため、学生自身に疑問文の問題を発案させる。	「理解」 文法構造を理解できたか。
(6) or のある疑問文の練習	・学生の興味を引くよう、判断に難しい問題を使う。 ・数名に発表させ、英文に誤りがいないか確かめる。	「表現」 学習した内容を用いて、質問することができたか。
(7) 付加疑問文の文法説明とパターンプラクティス	・繰り返しパターンプラクティスを行うことで、知識定着を図る。	
6. 宿題の確認と要点を押さえる。	・難易度の高い問題や補足の必要な箇所について事前に説明し、途中で投げ出してしまわぬよう留意する。	

6. 検討会ならびに参観者からの意見

ここでは、研究授業後の検討会ならびに参観者からの「授業参観記録」で出された意見を紹介する。コメントの観点については、本学所定の「授業参観記録」の様式に従っている。なお、下線を引いた部分については、クラスの雰囲気、風土づくりや協同学習に関連している意見である。

(1) 授業を積極的に評価できる点

①教育内容

- ・ 「多様な疑問文」が今回のテーマであるが、語彙力、会話力、コミュニケーション力など総合的な英語の力をつける内容が組み込まれていた。
- ・ 語彙力を高めるための小テスト、疑問文を使いながらの会話練習、前回の復習の会話練習、本日のUnitに関する文法説明と使い方の練習など、覚える・理解する・考える・実際に文章を作ってみる・会話してみるという多くの内容が含まれていた。
- ・ 英語が苦手な学生に英語に対して興味をもたせて、また学生も楽しみながら学んでいるという印象があった。
- ・ 中学内容の「学び直し」であった。ただ、英語の学び直しは、多くの大学で行われているようで、決して恥ずかしいものではない。多くの人が、日常的なコミュニケーションを行う上で最低限必要な知識のほとんどは、中学英語の中に含まれていると言う。つまり、中学レベルの英語を理解し使えるようになれば、日常生活で困ることはないのではないか。そうであるならば、本授業は、まさに使える英語を学ぶ授業であり、学生にとって極めて有意義なものであると考えられる。
- ・ 授業において、教員の作り出す空間と、学生の作り出す空間との調和がよく取れていたように感じた。ともすれば遊び的な傾向にながれる可能性を、適切に管理されていた。

②授業方法

- ・ 語彙力を高めるために小テストを取り入れている。小テストという目標があると覚えようとするのでよいと思う。授業時間外の学習にもなる。小テストの結果を英語で学生が発表し、先生が正しい発音で34名の学生に対して繰り返して言うことで、数の正しい発音を自然に身につけることができると思った。また、満点が取れている学生や

もう少しの学生に対し褒める等、やる気にさせる言葉をかけているので、次回はもっと頑張ろうという気にさせている。

- ・ 主語と動詞を徹底して指導している。英文と日本語の訳文に対して、それぞれ主語と動詞を確認し理解させていた。何問も確認することで学生は十分に理解することができたと思う。
- ・ 先生が英語で学生に話しかけることが多く、生きた英語を耳で学び、英語を聞くことに慣れる環境になっていた。また、先生の発音に続いて学生が繰り返すことで言うことに慣れ、正しい発音も習得できると思った。スクリーンに映すパソコン画面の表示が工夫されており、目からも英語が印象に残る授業になっていた。
- ・ 例文の練習も、少しずつ内容を変えて質問することによって、学生は考えながら答えを出し、できるようになる喜びも味わっていると感じた。
- ・ 会話の練習は、隣の人とペアになって行い、全員が会話を体験できるようになっていた。学生は楽しそうに会話の練習をしていた。英検の面接試験練習にもなるという説明もよかった。
- ・ スクリーンを上手に使っていた。同じ文章であっても、問題を見せて答えを考えさせる、答えを見せて問題を考えさせるなど工夫があった。同じ問題を繰り返し使うことで、次第にその文章や文法を覚えることができるようになっていた。
- ・ 手を挙げさせて発言させる方法が成功している。かつ、ほぼ全員が手を挙げて発言していること。なお、アドバンストクラスでは、挙手しない学生が多いということも参考になった。
- ・ 教員が一方的に講義するのではなく、学生一人ひとりが参加し、自分で質問内容等を考えながらグループ内で質問を行うことで、楽しみながら授業を受けている。また、学生自身に疑問文の問題を発案させることで、文法構造を完璧に理解できるよう工夫が凝らされていた。
- ・ 学習目標がはっきりしており、計画に沿って授業がされている。学生への質問も取り入れ、学習目標からぶれないよう、かつすべての学生が積極的に授業に取り組めるような配慮が感じられた。
- ・ 声を出すところではほぼ全員がしっかり声を出している。
- ・ 4校時という若干眠たくなる時間帯に、全員が英語に集中しており、演習ならではの光景だった。また、可能な限り、容易な英語を使って、学生に指示を出している点

は、英語ならではの光景であり、新鮮だった。

- ・ はきはきと聞き取りやすい声で説明されていた。常に学生の理解度を確認しながら、授業を進行している。

③その他

- ・ 先生が生き生きとした指導をされており、テンポよく授業を進められていた。その雰囲気に学生がついてきており、学生参加型の授業となっていた。質問に対して教室のあちこちから答える声が出ていた。また、積極的に手をあげて答える学生もいた。
- ・ まず、「本時の目標」をスクリーンを使って示し、今日は何を学び何を身につけるかを意識づけていた。授業の終わりに「本日の目標」を達成できたかどうか隣の人と確認させ、振り返りをさせていた。学生も先生も目標を意識した授業になっていた。
- ・ 先生が教室の中をよく動き、学生の近くで笑顔でアドバイスをすることで、学生のやる気が高まると感じた。学生は委縮することなく、明るい表情で授業を受けていた。
- ・ 学生がとても活発に授業に参加している。授業に活気が感じられ、工夫にみちた、ワクワクする授業であった。

(2) 授業の改善にかかわる点

③その他

- ・ 推測ゲームと一緒に参加させてもらった感想ですが、この時は、辞書をつかって日本語を禁止にして演習させるのもいいような気がする。私が英語で話しかけても、学生は日本語を話します。

(3) 授業全体の感想

- ・ 研究授業お疲れ様でした。少しざわざわしているのが気になりますが、教員と学生が一体化しているような授業の印象を受けました。私が基礎演習の算数を教えていると、最初はついていけても少し難しくなるとすぐ学生は挫折してしまいます。このままであれば、ある程度は英検3級を合格させることができるということなので、底辺レベルの学生をひっぱる力が井上先生にはあるのだと思います。私には、難しいことです。また、検討会で先生がいわれていた、〇〇（学生）の件ですが、そのことについて私の授業でも注意しないといけないことに気がつきました。私の授業では、少し

声をかけるようにしたいと思います。

- ・ 授業を参観させていただきありがとうございました。学生がとてもいきいきとして、楽しそうに授業に参加しているのが感じられて、井上先生の授業への取り組みが、しっかり伝わっていると思いました。
- ・ たいへんはっきりとした口調で、学生の理解を確認しながら授業展開をされていた。井上先生のキャラクターがよく現れていたと思う。私の授業は、強制的な授業方法および内容の部分があるため、たいへん参考になった。お疲れ様でした。そして、ありがとうございました。

以上が授業を参観して下さった先生方からいただいた授業参観記録に記載された評価や感想である。これらを踏まえ、次の項では今後取り組むべき課題について考察する。

7. 支持的風土づくりに向けた今後の課題と取り組み

これまでに実施した2回の研究授業は専門選択科目であったため、受講者は英語が得意、好きという学生が多く、また比較的受講者数も少ないため、同じ目標に向かって英語力も学習意欲も受講者全員の均整のとれた状態での授業であった。一方、本研究授業の「英語Ⅰ」は、前述した通り必修科目であるため、たとえレベル別にクラスを編成していたとしても力や意欲には大きな差が見られる。また、人数も1クラス30名を超え、語学の授業としてはクラスサイズが大きく、それに伴って多くの問題が生じている。

これらの現状を踏まえ、本研究授業ならびに支持的風土づくりの観点から、次の3点を今後の課題として挙げ、それに対する具体的方策を述べる。

(1) 学科全体で「支持的風土」を作り上げる

日本人が英語を話せない理由に、よく羞恥心が挙げられる。英語を発音することへの恥ずかしさや間違えることへの恥ずかしさなど、羞恥心は英語学習のブレーキとなり得る。前述したとおり、この羞恥心を払拭するためには、「支持的風土」が重要な役割を果たす。間違っても笑われない、周囲がそれを元にして支持的に考えてくれるという安心感のある雰囲気、クラス全体がそのような温かい雰囲気＝支持的風土が出来上がった環境であれば、英語を発することや間違いへの羞恥心がなくなる。

全く同じ方法で授業を行ったとしても、クラスの雰囲気により授業展開も到達度も大き

く変わってくることは我々の日々経験するところである。本研究授業を行ったこのベーシッククラスは、「6. 検討会ならびに参観者からの意見」において先生方からも評価されているように、その「支持的風土」が根付いているため、教員が投げかける質問に対して多くの学生が挙手したり、自由に自分の考えを発言したりできている。ベーシッククラスにこの風土が定着した理由に、複数のムードメーカー的学生の存在が考えられる。誰かの発言に対して、常に好意的かつ受容的な言葉で反応を示し、教室全体を温かな空気で包む。発表する人や内容の正誤に関係なく、どのような発言に対しても同様に支持的に応え、さらにその発言を教室全体で共有できるよう働きかける。こういった学生の存在が、安心して学習に取り組める教室環境の構築につながったと推察される。

一方、アドバンストクラスは、この風土が形成されていない。これは、上位クラスということで、自分の英語力は周囲より劣っているのではないかと常に劣等感や不安感が付きまとい、自分の発言が他者にどのように受け取られるのか過剰に意識したり、間違いをおかすことへの極度の羞恥心から、発表や発言に躊躇したり活動に消極的であったりする印象を受ける。

大塚（1977）にもあるように、学級の風土づくりは、単に一人の学級担当教師の力によって達成しうる課題ではなく、学校全体の社会的風土の中で、学級に関わる他の教師や父母との協力の営みがあって醸成されていくものである。また、大玉（1977）では、学生の学級づくりや人間関係作りを目指して苦心している間に、自然と教師の集団づくりができていたという経験談も多く述べられている。したがって、担当する一科目における取り組みではなく、学科全体の人間関係・信頼関係作りとして捉え、学生が受けるどの授業においても、互いが認め合い、安心して学習に取り組める環境作りや教員間の共通理解、相互協力が必要となってくるであろう。そのためにも、入学直後に「構成的グループエンカウンター」のような人間関係作り、学生対学生間、学生対教員間の信頼関係を構築し、大学生生活や学習に取り組めるような手立てを講じることが望ましい。

また、支持的風土づくりの第一に、教師の「許容し支持する」態度が挙げられ、教師の構えや態度が子供の態度や行動を誘発すると考えられている⁷。したがって、教師自身が自らの人間性を高める努力も当然必要となってくるであろう。

（2）クラスサイズの問題を協同学習で補う

日本における外国語教育の改善に向けた取り組みを行っている日本外国語教育改善協

議会は、「小学校、中学校及び高等学校の学習指導要領の実施等に関する意見」の中で、小学校における「外国語活動」のクラスサイズを15人以下とし、一人ひとりの児童が実際に「言語活動を効果的に行う」ことができるようにすると提言している⁸。また、The Association of Departments of Foreign Languages (ADFL)によれば、外国語教授のガイドラインの中で、語学コースの理想のクラスサイズは20名以下とある。さらに、クラスサイズが小さければ小さいほど、学習者の満足度や記憶が高まるとしている⁹。

したがって、大学で一斉授業を行う場合、30名前後のクラスサイズは大きすぎることになる。そこで、学生のアウトプットの機会をより多く設けるためにペアやグループ活動、協同学習の活用が求められる。本研究授業の学習指導案【学習内容3. 会話練習を行う】【学習内容5. (5) コミュニケーション活動】において、ペアワークと協同学習を取り入れた。これらの活動は、学生一人ひとりが発言する機会が多く持てる一方で、自分の発する英語が正しいか否かの判断ができない、課題に無関係な行動が見られる、活動に参加しない学生が出てくるといった問題も生じる。他にも協同学習の短所として、活動に対する不平不満、グループメンバーへの怒りや反感といったグループ活動に対する学生の抵抗や、能力格差、活動ペースの異なるグループへの対処、評価方法など、協同学習の効果を最大限に高めるためには対処すべき問題も多くはらんでいる¹⁰。協同学習がもたらす優れた成果を取り入れつつ、今後は日々生じる諸問題に対して適宜微調整を加えていく必要があるだろう。

(3) 学生目線を取り入れ楽しく学ぶ

学生は、興味のあることや楽しいと感じることに対しては、こちらの働きかけがなくても目を輝かせ傾注する。逆に、面倒なことややりたくないこと、面白くないことについては、教師側がどれだけ熱心に力説を行っても、学生には届かない。これまでは授業や勉強とは、自分の嗜好や意志に関係なく“当然学べきもの”として考えてきたが、またそのように学生に指導してきたが、最近の学生の様子から“楽しく学ぶ”ことにこそ意義があるのではないかと感じるようになった。学ぶことが楽しいと感じられれば、さらに学びたいという意欲と向上心が生まれる。人間誰しも楽しかったことや新たな発見、驚きは、いつまでも記憶に残っている。生涯学習の観点に立てば、英語を学ぶことが楽しいと実感できれば、社会人になってからも学び続けていくことが期待できるであろう。

以上のことから、授業をいかに楽しくできるか、教材をいかに学生の興味を引く内容に

転換できるか、提示方法にいかにか工夫ができるかが重要となってくると同時に、そのような取り組みが功を奏することで、自然と支持的風土構築へとつながっていくと推察される。

本研究で取り上げた「支持的風土」は、英語の授業にとどまらず日々の大学生活においても互いを認め合い、信頼し合い、安心して生活を送るには必要不可欠なものである。教員相互の共通理解のもと学科全体で風土を構築し、より良い授業へと努力を重ねていきたいと考える。

英語 I (ペーシタクラス)

Guessing Game

No. _____ Name: _____

 [Information about the person]	 [Information about the object]
---	---

注

- ¹ 小池生夫編（2008）『応用言語学事典』研究社、161頁
- ² 次重寛禧（2002）『英語授業の創造』鷹書房弓プレス、92頁
- ³ 片岡徳雄（1986）『個を生かす集団指導実践大系－第13巻 支持的風土の学級を創る－登校拒否の超克』教育出版センター、26頁
- ⁴ 大塚忠剛編（1977）『個を生かす集団づくり〈3〉 支持的風土づくり』黎明書房、184頁
- ⁵ 4に同じ
- ⁶ 杉江修治訳（1998）『学習の輪 アメリカの協同学習入門』二瓶社、18頁
- ⁷ 大塚忠剛編（1977）『個を生かす集団づくり〈3〉 支持的風土づくり』黎明書房、226頁
- ⁸ 『英語教育』2011年10月号、大修館書店、66-67頁
- ⁹ ADFL General Guidelines for Departments. Association of Departments of Foreign Languages.
<https://adfl.mla.org/Resources/Policy-Statements/ADFL-General-Guidelines-for-Departments>
(2015/11/20)
- ¹⁰ 安永悟訳（2012）『協同学習の技法 大学教育の手引き』ナカニシヤ出版、59-62頁

参考文献

- ・磯田貴道（2012）「協同学習を応用した英語授業の効果検証」『広島外国語教育研究』第15号、65-73頁
- ・今井裕之（2011）「英語の授業にもっと協同学習を」『Teaching English Now』Vol.20、2-5頁
- ・『英語教育』2011年10月号、大修館書店
- ・大塚忠剛編（1977）『個を生かす集団づくり〈3〉 支持的風土づくり』黎明書房
- ・大玉一實（1977）『個を生かす集団づくり〈5〉 個を生かす集団学習』黎明書房
- ・片岡徳雄（1986）『個を生かす集団指導実践大系－第13巻 支持的風土の学級を創る－登校拒否の超克』教育出版センター
- ・小池生夫編（2008）『応用言語学事典』研究社
- ・次重寛禧（2002）『英語授業の創造』鷹書房弓プレス
- ・杉江修治訳（1998）『学習の輪 アメリカの協同学習入門』二瓶社
- ・盛岡貴昭（2014）「協同学習理論を活かしたペア・グループ活動への取り組み」『大阪商業大学論集』第9巻第4号、123-134頁
- ・文部科学省（2008）『中学校学習指導要領 外国語編』
- ・文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領 外国語編』
- ・文部省（1972）『中学校学習指導要領 外国語編』
- ・安永悟訳（2012）『協同学習の技法 大学教育の手引き』ナカニシヤ出版
- ・Association of Departments of Foreign Languages. ADFL General Guidelines for Departments.
<https://adfl.mla.org/Resources/Policy-Statements/ADFL-General-Guidelines-for-Departments>
(2015/11/20)

執 筆 者 紹 介

岡本	丈彦	高松	松大	学学	経経	営営	学学	部部	講講	師師
川崎	紘宗	高高	大大	学学	経経	営営	学学	部部	講助	師教
竹内	由佳	高高	大大	学学	経経	営営	学学	部部	助卒	生授
花城	清紀	高高	大大	学学	経経	営営	学学	部部	教准	授授
松中	裕太郎	高高	大大	学学	経経	営営	学学	部部	准卒	生生
末包	昭彦	高高	大大	学学	経経	営営	学学	部部	卒卒	生授
溝渕	利博	高高	大大	学学	経経	営営	学学	部部	教教	授授
向居	曉詞	高高	大大	学学	経経	営営	学学	部部	准講	師授
竹谷	美ね	高高	大大	学学	経経	営営	学学	部部	教准	授授
川原	あか	高高	大大	学学	経経	営営	学学	部部	准講	師授
山口	直木	高高	大大	学学	経経	営営	学学	部部	教准	授授
山田	美季	高高	大大	学学	経経	営営	学学	部部	教准	授授
藤井	明日	高高	大大	学学	経経	営営	学学	部部	教准	授授
山田	純子	高高	大大	学学	経経	営営	学学	部部	教准	授授
井上	巳子	高高	大大	学学	経経	営営	学学	部部	教准	授授
高塚	順教	高高	大大	学学	経経	営営	学学	部部	教准	授授
田中		高高	大大	学学	経経	営営	学学	部部	教准	授授

研 究 紀 要

第64・65合併号

平成28年 2 月25日 印刷

平成28年 2 月28日 発行

編集発行

高 松 大 学

高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841-3255

FAX (087) 844-4759

印 刷

株式会社 美巧社

高松市多賀町 1 - 8 - 10

TEL (087) 833-5811